

---

# 君の声を聞きたい

紅月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君の声を聞きたい

### 【コード】

N8938M

### 【作者名】

紅月

### 【あらすじ】

それはそれは、きっと優しく悲しい物語なのかもしれません。

彼は優秀でした。

彼には望みがありました。

彼には彼女がいました。

その彼女がやわらかく微笑んで出すこれまたやわらかい笑い声が大好きでした。

「ほんとに行っちゃうの？」

「ああ、向こうに行けばお前の病気に効く薬の研究が盛んだし、君に早く薬を届けてやりたいしね。」

ぼん、と年齢よりも身長が低く童顔な彼女の頭をなでて彼は優しく笑います。彼の望みははまだ薬が存在しない病気を患う彼女のために薬を作り、彼女に外を歩かせてあげたいというものでした。だから彼はこれから海を越え、彼女のための薬を作りに行きます。

何年かかかるかわかりませんが、彼は彼女に自分の携帯電話の番号を教えて旅立っていきました。

毎日、電話を掛け合っとうしようもないことに笑い、どうでもいいことに怒り月日は過ぎていきました。

それから何年かがたちました。

「教授！！ この検証結果は……………」

「間違いない！！ これで……………これで多くの人の命を救うことができる！！」

その場にいた研究員が全員、歓喜の声をあげました。男も女も恥ずかしがることなく抱き合い、雄たけびを上げる者、涙する者。彼は何の反応も示しませんでした。

「へい!! お前はうれしくないのか?」  
「うれしいよ。でも、実感が沸かなくて。」  
「故郷にいる彼女を治してあげることができるのよ。喜ばしいことじゃない!!」

彼がこの薬の完成を実感し、喜びに涙を流したのは教授が世界中に薬のことを発表し、少しずつ病気の完治が報告され始めてからでした。

そして、その日も二人は電話で話をしました。

「薬ができたんだ。これで君を治すことができるよ。」  
「知ってるよ。だってテレビでもやってたじゃん。私、あなたから一番に聞きたかったのに……。」  
「ふてくされるなよ。……ごめんな、なんだか実感が沸かなくて言えなかったんだ。」

電話の向こうの彼女はうれしさ半分、怒り半分のようです。ねた声を出す。それを聞いてなだめる彼。やがてその応酬は両者が笑い出したことで終了した。

「でも、本当に治るんだね……。」  
「信じられない?」  
「ううん。私も今はその薬を飲んでるし、よくなっている感じがするから信じてないわけじゃないんだけど、なんだかうれしくて……。」

話しているうちにどんどん声が小さくなっていく彼女。

「泣いてるの?」

「……泣いてない。」

「泣いてたんだ。」

「だからっ、泣いてないってば!!」

「……。」

「……。」

「……ごめん。」

そしてまた二人は笑いあった。彼には彼女の笑顔が容易に想像できていた。それからしばらくの間、彼は研究室でこの薬に関することをまとめたり、他の薬の研究にも少しばかり協力していた。そんなある日、彼女のほうから誘いの電話がかかってきた。

「あのね？ だいぶ調子もよくなったの。でね、先生も外に出ていよって許可をくれたの。だから、お願いがあるの……。」

「お願い？」

「うん。」

「何？」

「あのね？ 私と一緒に今度のお祭りに行つて欲しいの。ずっと、ずっとあなたと行くのが夢だったの。」

「お祭りって言うと、七夕の？」

彼女の地元の七夕祭りは八月の頭に一週間行われる。かなり大きな規模で行われ、他見からの観光客も多い。

「うん。最終日に。一緒に行きたいなって思つて。でね、待ち合わせ場所は駅前でもいいかな？」

「僕が行かないとかって考えないの？」

「来てくれないの？」

涙声になる彼女に苦笑しつつ帰ることを伝えた。とたんにうれし

そうにはしゃぎだす彼女。ああ、わかったよ。それじゃあその時に。そう言つて彼は電話を切つた。顔がほころぶのがわかる。そうなる。と帰る準備をしよう。そうだ、彼女にプロポーズしよう。ずっと思つていたことを彼女に伝えよう。そう思いながら帰る準備を進めていく。心はもう、海の向こうの、彼女のいる故郷に飛んでいた。

実は祭りまではまだ三ヶ月ほどあり、彼はこの後しばらく何を彼女に渡そうかすごく悩むのだが、それはまた別の話である。

そして、この時から、彼はずっと誰かに見られているような感覚を覚える。別に実害はないので無視をしていたが、当然のことながら不愉快だった。

あと、三ヶ月。そう呟いた声は誰にも届いていなかった。

そうこうして帰ってきたのは、祭りの最終日の前の日だった。彼女に会わないようにその日は過ごした。それでも彼女からの電話はいつもどおり受け取つて話をした。手には彼女のために買つてきたネックレス。本来は指輪なのかもしれないが彼女に似合うと思つたシンプルなデザインの十字架のネックレスにしたのだ。

「ええー。帰つてきてるのに何であつてくれないの？」

「頼むから今日はゆっくり休ませてくれよ。」

「じゃあ、明日、絶対に遅れないでよ！！ 駅前に七時だからね！！」

「わかつたよ。あ、あのさ……。」

大事な話をしたい、という言葉は伝えられないまま、また明日とだけ返した。

「変なの。まあいいんだけどね。じゃあまた明日。」

「おやすみ。」

幸せな夜。幸せな夢を見て彼は明日を迎えるために眠りに落ちる。彼女は彼に会えることを楽しみに明日を迎えるために眠りにつく。

もう、間に合わない。その様子だと忘れてしまったの？ 思い出して、思い出して。誰かが咳いた声が風に流れた。覚えてる。そう答えた声はどこにも反響しなかった。

朝起きたら四時だった。夕方の四時だった。

「な、なんだとお!!」

まだ二時間あるが身だしなみを整え、駅前についた頃には時計は五時五十分を指していた。間に合った、と息を吐き出したところに彼女がやってきた。白いロングのワンピースを着た彼女はあまりにもきれいで、絵から抜け出たような儚さをもって彼の前で足を止めた。互いに名前を確認して笑いあった。

そこからは夢のような時間だった。彼は射撃で景品を取り、彼女は金魚すくいでおじさんにサーブスしてもらった金魚をいとおしそうに眺めていた。

「よし、あなたの名前はでめくんによよ。」

「また、単純な名前だな。」

「いいでしょ!! あなたとの大切な思い出もん。大切に育てないかね。」

「そうか。」

祭りを一通り堪能すると、彼女は彼の手を引いて移動をはじめた。

時間はまだ八時半で、これから祭りのフィナーレというタイミングである。たしか出会ったときに「今日は最後まで楽しもうね!」「と言っていたのは聞き間違いだろつかと首をひねりながらも彼女についていった。

連れて行かれた先は彼女が昔入院していた病院だった。

「こんな時間にいいの?」

「うん。ちゃんと院長先生には話してあるの。だから大丈夫。」

「へえ。」

案内されたのは病院の屋上。少し高い丘にあるのと八階建てという高さで町を一望することができる。

「すごい景色だな。」

「でしょ? でもね、本当にすごいのはこれからなんだよ?」

しばらく見ていると、明かりが川を流れていく。一つ、二つ。やがてそれは沢山になって光の川のようになった。

さらには祭りのフィナーレである花火も始まった。空は花火。地上は川と町が光って目の前すべてが光に覆われたような、そんな感じがした。

「ほら、私たちの地元って天の川みたいに見えるのに最終日に川に灯籠を流すでしょ? この病院って花火も灯籠もどつちも見ることができの。」

そついう彼女の顔はどこか誇らしげで寂しげだ。

「私ね。ずっとこの病院から見てたの。だから今日はあの中に入れて本当にうれしかった。いつもはあんなに悲しい思いしかなかった



のに、今年はとつてもうれしいんだよ。」

くしゃっと涙に顔をゆがめた彼女の肩を抱いてぼんぼんと頭をたたく。

「うれしいのなら笑ってくれよ。僕は君の泣き声を聞いて泣き顔を見るために帰ってきたんじゃないんだから。」

「う……ん。そうだね。改めてだけど、おかえり。」  
「ああ、ただいま。」

光の洪水は二人の幸せを祝うかのように続いた。天の川のように光が流れる川を見て彼女は思った。私とあなた、まるで織姫と彦星みたいだね、と。

ああ、光が消えてしまう。消えてしまったら、もう……。  
そうだね、時間が来てしまうね。

これはもう、変えることはできないの？  
できないんだよ。そう、できないんだよ……。

「終わっちゃったね。」  
「うん。」

二人は肩を抱き合ったまま最後の花火が消え、灯籠が流れていくのを見送った。それからいつもの電話のようにいろいろと話し合った。屋上にいつまでもいいのかと聞いたら、それは構わないと彼女は返していた。明日の朝には出ないといけないけどね。

「ねえねえ、あなたはもう少しこっちにいるよね。」

「うん。」

「なら、明日も付き合って欲しいところがあるの。」

「どっ？」

「お父さんと、お母さんに会って欲しいの。」

「どうして？」

「……………から。」

「え？」

しばらくぼそぼそ言っていた彼女はようやく決意したのか大きく息を吸い込んで思っきり大きな声で言った。

「あなたと結婚したいって私の両親に紹介したいの!!!」

沈黙。見る見る顔が赤くなっていく彼女に対して呆然としている彼。あまりにも反応がなく、それを彼女は拒否と受け取ったらしい。じわりとまた涙があふれてきていた。でも、彼の前で、彼女の申し出を拒否した彼の前で泣くことが恥ずかしかった彼女はそのまま駆け出して、屋上から出て行こうとする。

彼は慌てて彼女の腕をつかんだ。

「ちょっと、待ってよ!!!」

「離して!!! だって、嫌なんでしょう?」

「僕は、嫌だなんて言ってないよ?」

「え?」

「びっくりしたただけだよ。」

「え、じゃあ…………。」

彼は持ってきた箱を開けた。

「指輪じゃなくて悪いけど、これ。」

渡されたのは十字架のネックレス。

「これ、は？」

「本当は指輪なんだろうけど、君に似合うと思ったからこれにしたんだ。嫌だった？」

言葉もなく首を振る彼女の目には先ほどまでと全く意味合いの違う涙があふれていた。言葉なく抱きしめあった二人。いつまでそうしていたらだろうか。それはわからない。

「ねえ。」

「何？」

「このネックレス、つけてくれる？」

「いいよ。じゃあ、向こう向いてくれる？」

「うん。」

心臓の音が聞こえそうなほどときどきしているのが彼女にはわかった。金属特有の冷たさが気持ちいい。この火照った体を冷やしてくれる。

かしゅん。

彼女の首からつけている途中だと思いきネックレスが屋上のコンクリートの上に落ちた。

「もっ、何やってるの……よっ。」

拾い上げ、後ろを見るとそこに彼の姿はなかった。彼女は屋上にある唯一の扉の方を向いていたので彼が出て行ったはずはない。ま

さかと思つて下を覗き込んだが、幸いなことにそれらしいものは無かった。あまりのことに意識を失つた彼女は次の日の朝に早めに来た院長に発見され家に送り届けられた。

ごめんね。でも、もう少し早く切り出していたらこんな別れにはならなかっただろうに。

いいんだ。僕にそれを伝えるだけの勇気が無かつたんだよ。彼女がああ言ってくれなかつたら僕はずっと言えなかつただろうから、たとえそうだったとしても、よかつたと思つているよ。

そう。

ああ、そうだ。最後に、本当に最後にお問い合わせがあるんだけど、いいかい？

それから、彼女は何も口に入れなかつた。ただただ、彼のくれたネックレスを握り締め、人に会えば彼の行方ばかりを聞いた。不思議なことに、彼の泊っていたはずのホテルからは彼の荷物が消えていたらしい。盗難になるのだろうが、その盗難を訴えるべき彼もいなかつたため、この件はうやむやのまま処理されたいらしい。

一週間後、彼女のもとに不思議な郵便が届いた。郵便として配達されたのにあて先が書いてなくて、切手も貼つていなかった。でも彼女宛だとわかつたのは封筒の裏に彼の名前が書かれていたからだ。出だしは彼女の名前。

なあ、これを読んでいる頃、君はどんな状態になつているんだろうなあ。実は、僕は、君に言つてなかつたことがあるんだ。

僕はもう、死んでいるんだ。

「うそ……。」

信じてくれないかもしれないけれど、三ヶ月前にね。僕は車に轢かれて死んだんだ。

「うそよ。」

死んで、僕は君に気持ちを伝えられないことだけをとてつもなく悔やんだんだ。そうして悔やんでいる時に、僕は神様に願いを叶えてもらったんだ。

「願ひ……?」

僕は君と祭りの中で一緒に祭りを楽しみたかったんだ。そして君に気持ちを伝えたかった。神様は祭りの最終日の十二時まで僕がこの世にとどまることを許してくれた。本当ならものすごくいけないことらしいけれどこのままじゃとても見ていられないからって言うた。

最後に一つ。君に伝えたい事があるんだ。

だいぶ紙があまっているが続きは二枚目に書かれている。震える指で彼女は二枚目を持ち出し、読んだ。

好きだ。

たったそれだけの言葉が大きく、一枚に書かれていた。

そして、三枚目には二枚目の文字の大きさがうそのような小ささで文字が書かれていた。

君の事を幸せにはできないけれど、君には幸せであって欲しい。

その日、彼女は泣いた。食べていなかったことが嘘のように大きな声で泣いた。水槽の中の金魚が彼女を慰めるかのように泳いでいた。

(後書き)

どーも、紅月です。

ホラー作品の募集企画に参加しようと思っていたらなぜかこんなことになりました。

なんなんだろう、この恋愛もの。ベタだなあ、というのは自分でも理解しているつもり。

七夕祭りの時期は自分の地元に合わせてました。

ちなみに、書き始めた当初は死んだ彼女がメリーさんみたいになって彼のもとまで行って、「私の声が聞きたかったんでしょ？」で終わりにする予定だった。本当に何がどうしてこうなったんだろう。

それでは、読んでくださった皆さんに大きな感謝を。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8938m/>

---

君の声を聞きたい

2010年10月12日09時29分発行